

機関番号：32618

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20560584

研究課題名(和文) 児童養護施設の物理的環境と子供の発達に関する環境行動研究

研究課題名(英文) Environment-Behavior Study on Physical Setting and Children's Development in Children's Nursing Home

研究代表者

橘 弘志 (TACHIBANA HIROSHI)

実践女子大学・生活科学部・准教授

研究者番号：70277797

研究成果の概要(和文)：本研究は、児童養護施設を対象として、小舎化・個室化という施設の空間・環境が児童の生活やスタッフの関わり方等にもたらす影響を、子供の発達のプロセスの視点から捉えることを目的とする。全国アンケートから施設の抱える課題を捉えるとともに、小舎制・大舎制を含む5施設における生活観察調査を実施した。その結果、子供の発達に伴う施設空間の意味/役割の変化をモデル的に提示することができた。小舎化・個室化に対する多くの施設の期待がある一方で、実際には形だけの小規模化にはさまざまな課題がある。施設の養育方針と整合性を保つ物理的環境の整備が重要である。

研究成果の概要(英文)：This study aims to clarify relationship between physical environment of children's nursing home and behavior of children who live there from the aspect of the children's development. Especially the influence that making to the small scale and making to the private room was paid to attention. The questionnaire survey was executed for all institutions in Japan, and the observational research was executed for five selected institutions. The model of change in the meaning of institution's spaces according to children's development was found. Various problems are included in making of pro forma small-scale. The correspondence of the physical environment and caring policy of in each institution is important.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：工学

科研費の分科・細目：建築学/都市計画・建築計画

キーワード：児童養護施設 子供の発達 大舎制 小舎制 個室 環境行動研究

1. 研究開始当初の背景

児童養護施設は、児童福祉法において「保護者の以内児童、虐待されている児童その他環境上用語を要する児童を入所させて、これを養護し、あわせてその自立を支援すること

を目的とする施設」と定義された施設である。近年、育児放棄や虐待等が大きな社会問題としてとりあげられることが多くなっていると同時に、そうした子供の受け皿の一つである児童養護施設の需要は高まっており、実際こ

こ10年で在所児数は増加し、施設の平均在所率は78%から90%へと急上昇している。

我が国の少子高齢化社会という流れの中、高齢者福祉に関してはソフトの提供からハードの提供までさまざまな施策がとられているが、それに比べ児童福祉に関してはあまり多くの対策がなされているとは言い難い。近年子供に対する虐待等が大きな社会問題としてとりあげられることが多くなっているが、そうした子供の受け皿の一つである児童養護施設については、世間の認知度も低く、社会保障制度上の予算措置も高齢者施設にくらべ、実際かなり低く抑えられているのが実情である。需要が高まっている一方で、既存施設の老朽化が進んでおり、おそらく今後かなりの数の施設の建て替えが予想される。

高齢者施設の分野では、ここ10年で施設の形態は大きく変化している。ユニットケアやグループホームの考え方が少しずつ浸透し、また建築計画的な研究の蓄積も進んでおり、従来の一斉ケア型の大規模施設から、家庭に近い小規模な環境へと、施設形態が変化しつつある。この背景には、福祉の考え方が、救済モデルから自立モデルへ、病院モデルから生活モデルへの変化がある。高齢者は、施設のなかで救済・保護される対象としてではなく、自立して生活を営む主体として捉えられるべきであり、個人の存在を尊重しながら、一人ひとりが自ら生活を組み立てることを支援するための環境へと変容しつつある。

こうした動きに対して、児童養護施設の分野では、施設の環境についての関心は現場においてもそれほど高くなく、既存の環境の中でいかなるケアを実践するか、という視点のみが支配的である。新築・建替の施設数そのものがそれほど多くなく、建築計画的な研究はほとんどなされていないのが実情である。しかし前述したように、今後施設の建替えが進むことが予想され、現代の社会的ニーズに適合するとともに、児童一人ひとりの生活という視点に立脚した新しい計画論が求められるだろう。

2. 研究の目的

子供の発達のプロセスは、言うまでもなく発達心理学の分野で克明に扱われてきた分野であり、そこには多くの研究的蓄積が存在する。しかしそれらは主に、個人の内的世界の発達であったり、自分を取り巻く社会との関わりによって捉えられてきている。そこに物理的環境との関わりという視点は、それほど重視されてこなかったと言ってよい。環境の果たす役割や意義を捉える上で、子供の心理的側面、社会的側面を含め、人と環境との相互浸透的な関わりを捉えようとする環境行動研究の立場に立つことが、一つの大きな

理論的背景となる。

本研究は、児童養護施設を対象にして、環境の果たす役割を見出し、建築計画論に結びつける知見を見出すことを目的とする。小舎化を実現した施設、あるいは小舎化を目指す施設を対象に調査を行い、施設の空間・環境が児童の生活やスタッフの関わり方等にもたらす影響を捉え、子供の発達のプロセスに環境がもたらす影響についても捉えていくものである。

3. 研究の方法

(1) 児童養護施設全国アンケート調査

児童養護施設の施設状況や使われ方、意識などの全体的傾向を捉えるため、全国の全児童養護施設 566 カ所を対象に、アンケート調査を実施した。

- ・ 発送：2009年9月
- ・ 郵送による回収
- ・ 回答数：218 (回収率 38.5%)

(2) 児童養護施設における観察調査

施設における児童や職員の具体的な生活の様子、空間の使われ方を把握するため、数施設を対象として観察調査を実施した。

調査は、寮内共用空間を中心にした被参与観察とし、平日放課後～就寝の時間帯において、児童・スタッフの居場所や行為を10分ごとに記録した。また、観察調査に前後して、調査対象寮の児童およびスタッフに対しての聞き取り調査を実施した。

a) 小舎制施設の比較調査 1

- ・ A 施設
1950年開設、2006年小舎制に建替
定員48名(8名×6寮)、男女別縦割
調査：2007年11月
対象：女子寮×2(15名)

- ・ B 施設
1950年開設、2001年小舎制に建替
定員50名(10名×5寮)、男女別横割
調査：2007年11月～12月
対象：女子寮×2(13名)

b) 小舎制施設の比較調査 2

- ・ A 施設
概要は同上
調査：2009年10月
対象：女子寮×2(16名)
- ・ C 施設
1986年開設、小舎制
定員30人(10名×3寮)、男女混合縦割
調査：2009年11月
対象：混合寮×2(19名)

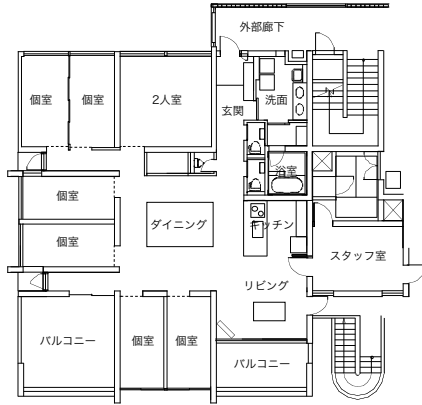
c) 大舎制施設の比較調査

- ・ D 施設
1953年開設、1977年移築

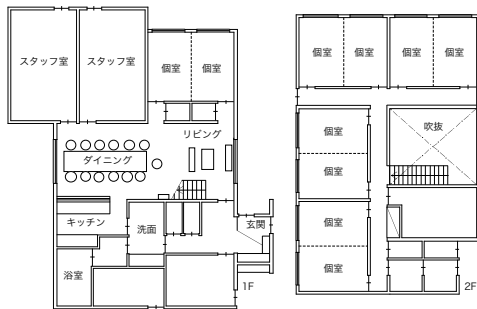
定員 60 名、幼児・男子・女子に分離
 調査：2010 年 11 月
 対象：女子寮（17 名）

・ E 施設

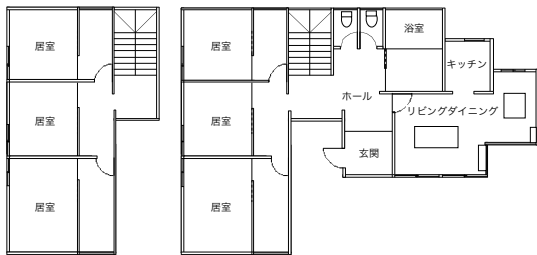
1949 年開設
 定員 150 名、男女別、縦割構成
 調査：2010 年 11 月
 対象：女子寮（17 名）



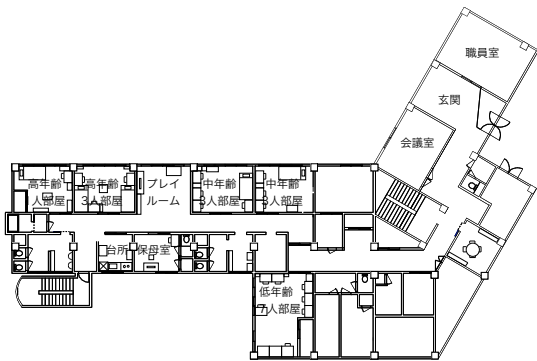
(図 1) A 施設平面図 (S 寮)



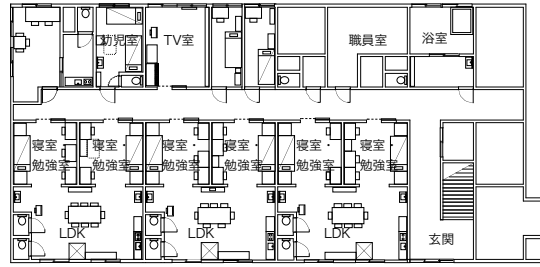
(図 2) B 施設平面図 (A 寮)



(図 3) C 施設平面図 (H 寮)



(図 4) D 施設 (2階女子寮)



(図 5) E 施設

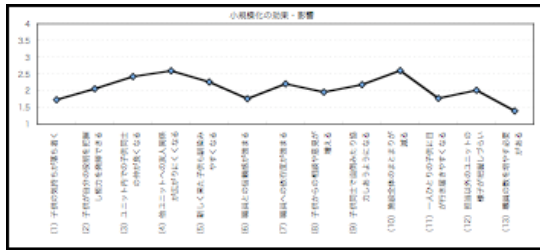
4. 研究成果

4-1. 児童養護施設全国アンケート調査

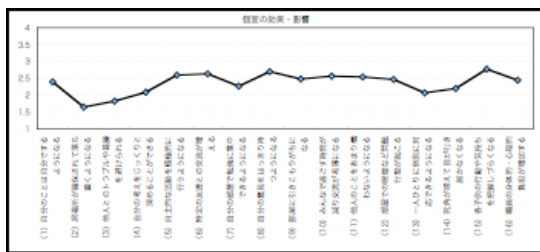
施設の設立時期は1940・50年代に集中しており、戦後間もない頃に大量の施設が設立したことがわかる。現在使用している建物の半数近くは30年以上使用しているものであり、建物の老朽化や現在のニーズへの適合性など、さまざまな問題が生じていることが考えられる。施設の半数近くが大舎制であり、グループホームを含む小舎制の施設はまだ2割程度である。大舎制に部分的にグループホーム等を付加した混合型も2割程度存在する。個室化の現状については、個室のない施設が4割、全体の2割以下が4割、4割以下と4割以上がそれぞれ1割程度ずつであり、ほぼ全個室が実現されている施設は数えるほどであった。多くの施設において課題として捉えられていることは、施設の老朽化などを別とすると、子供の個人空間の不足、一人で居られる空間の不足、家族と関わる空間の不足、などが挙げられており、多様化する子供のニーズに対して個別に対応できるような空間が不足していることが見出された。

施設の個室化の効果（あるいは小舎化に対する期待）は、「子供の気持ちが落ち着く」「職員との信頼感が強まる」「一人一人の子供に目が行き届きやすくなる」など、子供の個別対応への効果／期待が大きいことが分かる。施設の個室化の効果（あるいは期待）も同様に、「居場所が確保されて落ち着くようになる」「他人とのトラブルや葛藤を避けられる」「一人一人に個別に対応できるようになる」などの項目が高い。自由記述回答でも、現在の子供のニーズの多様化・複雑化にどのように対応すればよいのかが大きな課題となっており、子供同士の過干渉・過接触をいかに減らし、子供の置かれた状況を落ち着いたものとするかに心が配られていることが覗えた。一方で、小規模化することによって「ユニット内での子供同士の仲がよくなる」「新しく来た子供も馴染みやすくなる」「子供同士で面倒見たり協力し合うようになる」など、社会的関わりを深めることに対

してはあまり期待されていない。個室化によって「自主的な活動を積極的に行うようになる」「自分の意見をはっきり持つようになる」「自分のことは自分でできるようになる」など、子供の自立性に寄与すると考える施設もさほど多くはないことが分かった。



(図6) 小舎化の効果／期待



(図7) 個室化の効果／期待

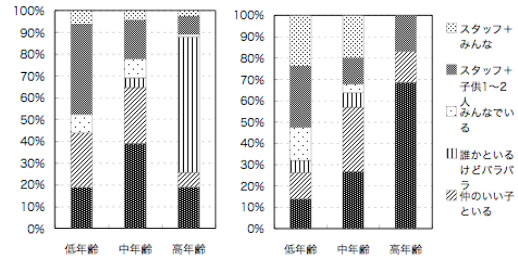
4-2. 小舎制施設の比較調査

(1) 小舎制の比較1

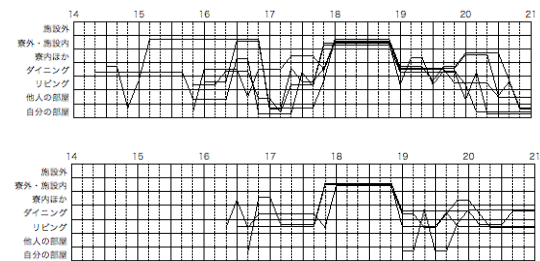
A施設・B施設の2施設について、児童の居場所、寮内での他者との過ごし方、リビングでの行為などを比較した結果、両施設で若干の違いは見られるものの、それほど大きな特徴は見出されなかった。両施設の対象児童を、低年齢・中年齢・高年齢の3グループに分けて比較を行った。両施設とも、低年齢～中年齢の過ごし方には大きな差は見られなかった。低年齢ほど、スタッフと過ごす時間が長く、リビング・ダイニングで過ごす時間が長く、中年齢になるにつれ、自室で一人で過ごす時間が増加する。しかし、高年齢になると、B施設では自室で一人で過ごす時間がより長くなる傾向があるが、いっぽうA施設ではリビング・ダイニングで他者とともに過ごす時間が増えるという差異が明確に見られた。一人ひとりの滞在場所を時間を追って追跡すると、A施設ではいずれの年代もリビング・ダイニングを中心とした似たような生活パターンを示しているのに対し、B施設では年齢が上がるほど一人ひとり個別の生活パターンを示すようになっていく。

2施設とも、児童が低年齢のうちにはスタッフが寄り添って生活を組み立て、高年齢になるほどスタッフと距離を置いて、自ら生活を組み立てるようになることは共通するが、その組み立て方には差が見られた。それはおそら

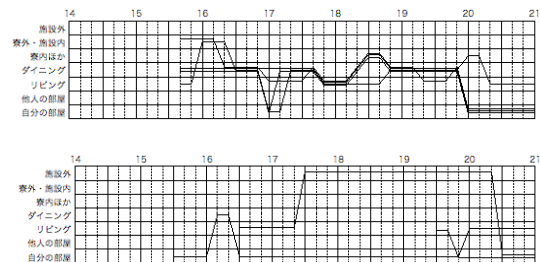
く2施設の児童の養育方針の違いが反映されていると思われる。A施設では縦割り構成の中で、社会的秩序を維持する役割を育むことが重視され、B施設では一人ひとりが自分だけの生活を作り上げていくための自立性を育むことが重視されている。



(図8) 年代別誰と過ごしているか (左：A施設、右B施設)



(図9) A施設児童の居場所の時間的推移 (上：低年齢、下：高年齢)



(図10) B施設児童の居場所の時間的推移 (上：低年齢、下：高年齢)

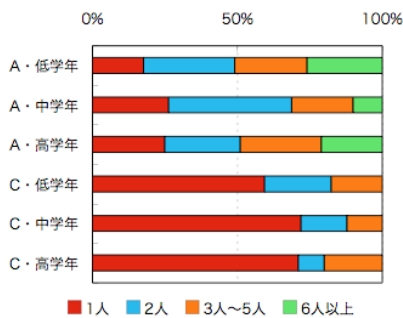
(2) 小舎制の比較2

A施設・C施設の2施設について、児童の居場所、寮内での他者との過ごし方、リビングでの行為などを比較した。

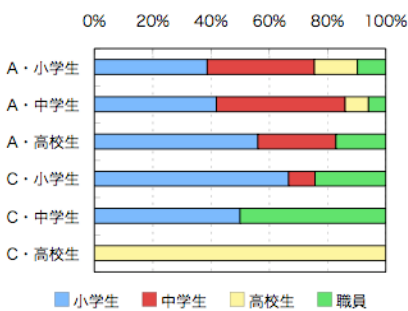
A施設に比べC施設のほうが、自室での滞在時間が長く、年齢が高くなるほどその傾向は顕著となる。A施設では年齢にかかわらずリビングで多様な行為が見られるが、C施設では高年齢になると食事以外の活動が極めて乏しくなる傾向がある。また寮内での人との関わりに注目すると、A施設では年齢にかかわらず様々な人数の集まりがあり、異年齢同士の交流が見られるが、C施設では低年齢児であっても一人でいることが多く、関わる相手も自分と同年齢に限られる傾向が強い。児童の一日の動きをみると、A施設では低年齢児は比較的似た

動きをしており、高年齢児になると多少ばらけ、共有空間の中で多様な過ごし方をしている。一方C施設では、低年齢児にばらつきが見られ、共用空間で一人～少人数で過ごしている様子が覗える。高年齢児になると居室での滞在が中心となり、結果的に似たようなパターンを示している。

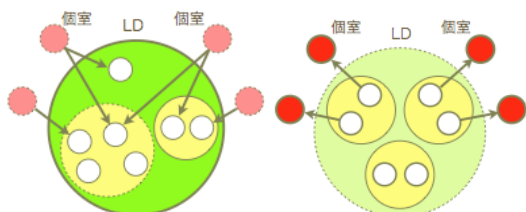
両施設の小規模化・個室化にはそれぞれ異なる側面が見出される。A施設では、小集団化によって児童同士の関わりを増やし、相互扶助や役割分担といった社会性の獲得を重視している。共用空間が豊かに使われる一方で、個室の存在が希薄化している可能性がある。これに対しC施設では、児童を大衆や過刺激から分離し、個別に対応しやすくするための小規模化と言える。生活が個室に依存しがちになり、共用空間での関わりは必要最小限に限定される。いずれも小規模化を目指す施設方針の反映であり、児童の生活に大きく影響を及ぼしていると考えられる。



(図11) 何人で過ごしているか



(図12) 誰と関わっているか

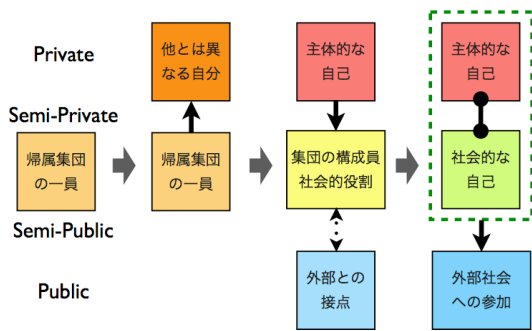


(図13) 両施設の小舎の意味モデル
(左：A施設、右：C施設)

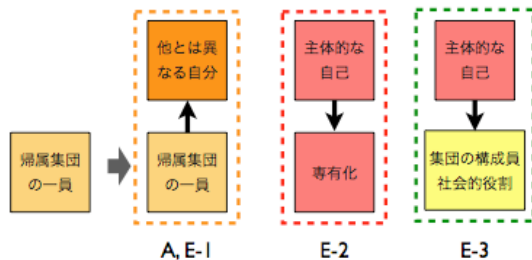
D施設は、低年齢～高年齢までが1フロアにまとめられ一つの生活単位となっている。低年齢と高年齢では自室の利用が多く、中年齢では共用空間の利用が多い。児童らの居場所は、年齢ごとに行動範囲が分かれる傾向がある。共有空間であるプレイルームの使い方をみても、時間帯によって年齢が分かれる傾向がみられた。児童たち同士の関わりも同年代に限定される傾向がある。小規模ユニットに分かれる空間構成に近いE施設では、ユニットによる生活の違いが明確に現れた。E1ユニットでは時間によって年齢ごとに共用空間を使い分け、共用空間での児童同士の関わりも多くない。E2ユニットは高年齢が共用空間を独占し、他年齢の児童はユニット外のTV室や他ユニットなどに行動範囲を広げている。E3ユニットは、共用空間に児童たちの滞在が多く、多様な行為が見られ、異年齢の関わりも豊富である。他ユニットに比べ、児童らが自分のユニットに所属しているという感覚が強い。

調査結果を参考に、児童の発達に伴う施設空間の役割を仮想的にモデル化した。低年齢児は、安心できる同年代の帰属集団に属することが重視され、自室と共用空間の意味的な相違は小さい。中年齢児になると、他とは異なる自分の存在への意識が高まり、そのための自室への欲求が現れる。高年齢となり自己の主体性が確立されるに伴い、帰属集団との関わり方も変化する。共用空間において、自立した個人として責任と役割をもって集団形成に関わっていく。施設における主体性と社会性が獲得されたとき、施設は確かな自分の居場所として感じられるものとなり、外部社会へ参加するための拠点となるのではないか。

ただし対象施設の現状は、上記プロセスの途上段階であり、いずれも児童の発達を支える空間としての課題が大きいことが覗われる。機能割り当て型の施設平面をもつD施設では、各年代でまとまったグループが行為に応じて空間を使い分ける傾向が強く、成長に応じた関わり方の違いが明確化されない。小規模単位化を目指したE施設では、ユニットによっては主体性と社会性の確立に向けて発達のプロセスが見られるが、D施設に近いユニットも存在する。単に生活単位を縮小化するだけでは、一部の構成メンバーの個性が強く影響してしまい、必ずしも児童の成長・発達に寄与する結果が見られるわけではない。



(図 14) 施設空間と児童の発達モデル



(図 15) 大舎制施設にみる発達モデル

4-4. まとめ

現在、児童養護施設の現場は極めて多くの課題を抱えている。施設自体の老朽化や狭隘化、職員不足、財政的な課題に加え、近年の虐待絡みの児童の増加、精神的な障害を抱えた児童の増加は、問題を大きく複雑なものにしている。自分の居場所を見失い、落ち着きがなく、人間関係の構築ができないなど、それぞれ個別の問題をもつ多様な児童に対しては、従来の一斉ケア・一斉養育の形では対応が不可能であり、いかに個別に対応するかが問われているようだ。その個別対応をより可能にする手段として、施設の小舎化や個室化に期待が集まっており、しかしそれを実現するだけの財政的・制度的・職員の背景が整っていないというジレンマを抱えている。

今回の調査からみてきたことは、単に空間を小規模化するという意味での小舎化では、必ずしも児童の成長・発達に寄与するとは限らないことである。少人数グループの中では特定の児童の影響もまた強いものとなり、弱い立場の児童が逃げ場を失う可能性もある。職員の関与や外部との関わりがそこでは大きな意味をもつと考えられる。また、小舎制の施設においては、各施設の理念・方針の違いが児童らの生活により大きな影響を与えていた。児童の個別対応だけを課題としてしまうと、児童の自立性や社会性の獲得という発達のプロセスの重要性に目が向きにくくなる可能性がある。

児童養護施設の場合、18歳になると卒業となり、施設から離れて一人で社会に赴き、社会と直面し、そこで自分の社会的役割を獲得していかなくてはならない。施設という特別な環境の中で馴染んでいくことだけが目的

ではなく、一人で生活を組み立てていくことのできる自立性と、さまざまな人と適切な関わりをつくり出していく社会性を獲得していく必要がある。施設とは、自我の発達にとって本質的に重要な時間を過ごす環境であり、その環境のあり方は、如何に子供を育てどのような大人として巣立たせるかという施設の理念や養育方針と整合していなくてはならないだろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計4件)

(1) 橋弘志「大舎制児童養護施設の空間構成が子供の生活に与える影響」人間・環境学会2011年度大会, 2011.5, 名古屋大学

(2) 橋弘志「小舎型児童養護施設における子供の発達と施設環境との関わりに関する考察」人間・環境学会2010年度大会, 2010.5, 東京工業大学

(3) 苅部美紀・橋弘志「個室ユニット型空間の与える子供の生活への影響 一児童養護施設における環境と生活とのかかわりに関する研究 その3」日本建築学会大会学術講演梗概集E-1, 2008.9, 広島大学

(4) 橋弘志・苅部美紀「施設方針の異なる施設における子供の生活 一児童養護施設における環境と生活とのかかわりに関する研究(その4)」日本建築学会大会学術講演梗概集E-1, 2008.9, 広島大学

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

○出願状況 (計0件)

○取得状況 (計0件)

〔その他〕

とくになし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

橋 弘志 (TACHIBANA HIROSHI)

実践女子大学・生活科学部・教授

研究者番号：70277797

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者 なし